

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
205
載

AIと問診

「AIで問診」という新聞記事を見て、いよいよそんな時代であることを改めて思った。AI

(artificial intelligence)

といわれても、専門家でない私たちには今ひとつイメージが乏しい。人工知能と言いつても同じ。具体的には何ができて生活がどう変わるのか、実感するのはもう少し先のことだろう、くらいの認識だった。

医療分野では、診断が困難な白血病を正確かつ迅速に診断した上に適切な治療薬の決定までをAIがやっつけてのけた、或いは乳がんの画像診断能力が人より優れていた、とのニュースがあった。内

視鏡を入れたらどこに病変があるかをAIが教えてくれる、という研究も進んでいる。今回は、診断や治療など医療のコアな部分ではなく、問診という初歩の段階でもAIが介入していることを知り、思っていたよりも早くAIの普及が進むことを実感した。

問診というのは、病院に行けば誰でも最初に書かされたり質問されたりするものだ。年齢や病歴や薬のアレルギーの有無など、どこでも似たような項目が並ぶ。AIが問診と聞くと、人の形をしたロボットがギーギーと歩いてきて色々質問するのかと思ったなら、そうで

はなくタブレットを使う方法らしい。タッチパネルで質問に答えたら、その答えの内容によって次の項目が決まるために、患者によって異なった質問で構成されることになり、対話型の問診が可能だという。すでに全国で100以上の病院が導入

してほめている。慢性的な看護師不足だから、仕事量が減ったことで看護師の仕事が楽になるのは歓迎するが、人員削減と聞くとき心穏やかにはいられない。AIの台頭によって不要になるのは銀行員や会計士だといわれているが、医療スタッフも

同じなのだ。



している。

さらに、問診結果はカルテに適した文体に整えられて医師に送られ、候補の病名が複数表示される。書類作成の手間が省けて時短につながるだけでなく、患者の待ち時間が短縮され、看護師の削減もできたと記事は手放

と、もはや医師も今ほどは必要ないということか。ちょうどOEC Dが、日本の医学部卒業生が35か国で最小であり、女性医師の割合も最低と発表したばかり。医師の数が先細りであってもAIでカバーできるのなら、むしろその方が都合がよい

ともいえる。AIに囲まれて治療を受ける、そんなSFチックな事態も、慣れればそれほど奇妙ではなくなるのかもしれない。一方で、AIにはできない、人間だけが持つ能力を追究する講座などもてはやされることだろう。

多死社会の先にあるのは、いったい何なのか。経験がないために想像がつきにくいのが、少なくともAIなしでは成り立たない世界が待っている。しかし、便利さの影には何がしかの不都合さ必ず存在する。インターネットの普及で、それは身に染みているはずだ。AIはどんな便利さを私たちに提供してくれ、どのような負の部分を生み出していくのだろうか。全く未知の新しい世界を見たい気がする。長生きしたいと思うのは、こんな時である。イラスト・伊藤栄章